



発行所
公益社団法人 国民文化研究会
(九州←東京←全国)
東京都渋谷区東1-13-1-402
振替 00170-1-60507
電話 03-5468-6230
FAX 03-5468-1470
<http://www.kokubunken.or.jp/>
E-mail: info@kokubunken.or.jp
月刊「国民同胞」編集部
毎月一回10日発行
購読料 年間2000円

第六十八回全国学生青年合宿教室開かる！

―「わがこととして考へた」二泊三日―

内海勝彦

第六十八回全国学生青年合宿教室が九月一日から三日まで「大学セミナーハウス」(東京都八王子市)にて開催された。本合宿は「祖国・学問・人生を語ろう!」の呼び掛けのもと、この三者を一体のものとして捉へて、自分自身のこととして考へる営みである。

最初の導入講義は神谷正一氏による「わがこととして考へる―国の護りを身近に―」であった。ロシアによるウクライナ侵略から一年半が経ち、日本の中にもウクライナの惨状への関心がやや薄いだけに見える昨今、今一度、日本人の国防に対する心組みの如何を、元航空自衛官の視点から語って戴いた。自衛官人生の根柢となった学生時代の体験談から始まり、他国からの脅威の実情を体験に基づいて語られた貴重なものだった。個人と国家との不可分な関

係についての示唆に富む内容で、ある学生は「隣国との問題は他人事ではなく、すぐそこに迫つてゐる、わがこととして考へる問題だと分かった」との感想を語つてゐた。まさに冒頭で述べた、「祖国・学問・人生」を一体として捉へる学びの大切さを考へる機会となった。

次は岸野克巳氏による「古典講義」だった。古典講義は合宿で必須のコマだが、それは古典を通じて日本文化を理解するためであり、「祖国」と「学問」を一体的に学ぶことに繋がる。氏は神職の傍ら、長く「古事記」を研究されてきて、「日本人は古来から、壊すのではなく、むすび、合せることによって新しいものを生み出してきた」とのご指摘は深いご研究からの言葉と拝せられた。短歌創作とその相互批評はこ

の合宿の重要な研修内容であるが、二日目の最初は小柳雄平氏による「短歌導入講義」だった。氏は、自分の思ひを率直に詠むことは「心の修練」であると説いて、さらに今日までの日本の歴史の中で短歌が広く詠み続けられて来たことを語りつつ具体的に短歌を例示してくれた。日本人の歩みにおける短歌創作の意味を悟ることになった。

次の小島尚貴氏の会員発表には、参加者から「自損型輸入」の実態を初めて知った」との驚きの声が生かされた。日本の文化伝統を取り戻して地方経済を立て直す、との信念のもとに奮闘する氏の生き方は、まさに「祖国・学問・人生」が一つになった生き方を感じさせるものであった。

続く招聘講師の竹本忠雄先生(文芸評論家・筑波大学名誉教授)による「大和心のかたちと秘密―現代文明の変貌に真向かひて―」は、聞者の方々に突き刺さるものだった。先生は冒頭、国文研合宿へのご出講は三度目となると仰られて、本会へ寄せられるお気持ちの深さが偲ばれて有難かった。また、ご講義は質疑応答も含め、二時間にも及ぶ熱のこもったもので、お疲れも見せられずにお話し下さった。

ご講義は皇后美智子さま(現、上皇后陛下)の御歌、万葉集などの古歌、能、「古事記」、さらには日本の武士道と西洋の騎士道との系譜の比較など、多岐に亘ったが、先生の学問の深遠な世界を見る思ひがした。最後に先生はマルローの「人生は何物にも値しない。しかし、人生に値する何物もない」といふ言葉を紹介されて、「私もはこの、『しかし』と言はせるものを、則ち銘々の水鏡を持たなければならぬ」と述べて講義を終へられた。「水鏡」とは、能からの言葉で、「別世界に入る導きの徴」とのこと。先生は私たちに、古来より受け継がれてきた本来の「大和心」を銘々の生き方に甦らせる、その「徴」(切っ掛け)を掴みなさいとお諭しをされたやうに思はれた。

二日目最後の伊勢雅臣先生のご講義では、とくに幕末の孝明天皇以降、今上陛下までの六代天皇のお歌が紹介され、「歴代の天皇が目指された国とはどういふものなのかを考へて、我々も大御宝(国民)の一人として、各々所を得て努めてゆくことが人生を有意義なものにする」と締めくくられた。この言葉は「わがこととして考へる」に繋がるもので、私にとっても重い宿題となった。(元株)IHI